

『新版・きけわだつみのこえ (第一集)』 改訂案とその典拠

岡田 裕之

はじめに

- 1 本文の改訂案とその典拠
 - 2 解説などの訂正
 - 3 その他
- おわりに

はじめに

日本戦没学生の手記『きけわだつみのこえ』(第一集)——『原版』は東京大学協同組合出版部、1949年、および『第二集・きけわだつみのこえ』——『原版』は光文社、1963年、は現代日本思想の古典というべき本であり、世紀を越えて読み継がれている。この二冊は現在、ともに日本の権威ある古典文庫の岩波文庫に採録されていて(『第一集(旧版)』1982年、『第二集(旧版)』1988年)、岩波文庫で最も愛読されている部類に属する。

「わだつみ」の言葉はもとより『万葉集』に見える「海」「海神」の古語であり、現在でも「海」の雅語として詩歌などに使用される普通名詞である。『原版』の編集者は、太平洋に、また海を越えて大陸に、戦死した日本戦没学生の「平和を希求する声なき声に耳を傾けよ」と願って、これを手記の表題とした。今日〈きけわだつみのこえ〉はこの意味において国語辞典に掲載されている。『アンネの日記』はユダヤ人迫害の文書記録としてユネスコ世界記憶遺産に登録された。筆者は〈日本戦没学生の手記〉もこれに劣らぬ世界の記憶遺産であると信じる。

ところで、現行の岩波文庫では、二冊の『原版』はいずれも増補改訂を受けそれぞれ『新版』として刊行されていて、『旧版』は新しく入手できず、『原版』はさらに入手し難い。増補改訂の『新版』は第一集、第二集ともそれぞれに独自の意義をもつが、そのうち『新版・第一集』には、私が、先に本誌掲載論文「日本戦没学生思想—『新版・きけわだつみのこえ』の致命的欠陥について」第578-579号、2007年1月-2月、において示したように、戦没学生原遺稿の歪曲、改竄の放置、誤読など重大な誤りがある。これは編集者であるわだつみ会(日本戦没学生記念会)が、95年、典拠たるべき日本戦没学生の手記の原本(遺稿)の収集をほとんど行わずに突然『旧版』を絶版に付し、一部の謄写稿と不正確な二次資料に基づいて短期間に編集したためである。さらに

これらの重大な誤りに加えて、瑕疵や編集者の不注意（ケアレス・ミス）や経歴、解説、年表などの誤りを含めれば、この『新版』には数百箇所及ぶ誤りがある。こうした欠陥は、当座の話題を提供するだけの出版物であればまあることで許されるかもしれないが、日本思想の古典ともなれば、許されない。編集者は細心の注意と高い見識をもって遺稿からの編集に当たらねばならない。

しかも『新版・きけわだつみのこえ（第一集）』は、編集の当初から、編集権者であるわだつみ会内の分裂を招き、さらには『旧版』編集者中村克郎氏はじめ遺族会員の大量退会から、中村氏を含む遺族による著作権侵害訴訟となり、訴訟対策上の会の無様な「訂正」（99年8刷）に至る不始末となった。

私はこの混乱の後に『わだつみのこえ記念館』設立のため会の理事長職を要請されたのであるが、理事会は『記念館』設立を目指し、戦没学生の遺稿の散逸を防ぎかつそれを一堂に集めて展示する構想を立て、遺族に依頼して保有する原遺稿を可能な限り収集し、朝日新聞社、立命館大学国際平和ミュージアムなどの協力を得て、2001-02年、大阪・京都・東京で大規模な遺書展を実施した。そこで私は、『新版・第一集』および『旧版・第二集』に多くの誤り（原遺稿からの乖離）を発見したので、理事会は、岩波書店の同意を得た上で、02年9月、『新版・第一集』の校訂と『新版・第二集』の編集を決定した。このうち『第二集』については、私の理事長任期中の03年12月、『新版・第二集・きけわだつみのこえ』として刊行することが出来た。

これに反し、『新版・きけわだつみのこえ（第一集）』の校訂の方は、95年当時『新版』編集の責任理事長であった高橋武智氏と編集に関わった会事務局の執拗な抵抗により難航し、今日に至るまで実現しておらず、重大な致命的欠陥と二百箇所（数え方による）に及ぶ訂正すべき瑕疵その他が、放置されたままになっている。校訂の理事会決定も、06年4月の総会決定も反故にされ、逆に機関決定に沿って改訂を主張する私の方が、人事案件の票決を繰り返し06年に常任理事から、08年に理事からと役員から逐次排除されるに至る。私が先に本誌に寄稿したのも、古典は編集権者の私有物でも会事務局の私有物でもなく、第二次大戦に苦難をなめた国民の共通する記憶遺産である、と考えたためである。

続いて私は、日本近代思想史を主題に著書『日本戦没学生の思想』法政大学出版局、2009年、を刊行し、それに付して『新版・第一集』の誤りを注記したが、これもまた改めて『新版・きけわだつみのこえ（第一集）』の訂正を求めたものであった。しかるに『新版（第一集）』の校訂反対者は、学術誌・学術出版における私の議論に答えず、論文一本、著書一冊の反論もない。反論できない。02年、校訂論議が始まって以来、私は、反対者から『新版』に〈誤りはない、原遺稿からの乖離はない〉との反論を受けたことはない。「反論はできないが校訂には応じない」というのだ。しかし国民の古典を誤りを知りながらそのまま放置することは、自らの良心にかけて、私には出来ない。

こうして私は2005年、会常任理事会内の校訂作業部会が作成した「『新版・きけわだつみのこえ（第一集）』校訂案」を基礎に、その後の考証を加えて、ここに『新版』の改訂案をその典拠とともに公表することを決意した。この「校訂案」は、05年9月理事会に、校訂作業部会責任者である私が提案したのだが、事務局が妨害し理事会が紛糾したので、06年1月理事会において、作業部会員の山本恒氏が私に代わって同じ内容を提案し、理事会が承認したものである。

私は、わだつみ会設立以来の最古参会員であり、かつ理事長・事務局長・常任理事・理事・監事と役員を歴任したたった一人の会員として、現在の会執行部によびかける。君たちからは票決のみで反論は無いのだから、会はこの改訂案を実施すべきである。ガリレオではないが、人事票決で私の排除を何度繰り返しても『新版』の〈原遺稿からの乖離〉はそのままである。

1 本文の改訂案とその典拠

石神高明

現行「今こそ自分は個人主義とその拡大に過ぎぬ全体主義と社会主義の明瞭なる対立を認める。その間を量すのも彼らの一つの戦術でしかない。」24頁。

改訂「今こそ自分は個人主義とその拡大に過ぎぬ全体主義と、社会主義の対立を認める。その間を量すのも彼らの一つの戦術でしかない。」

（典拠：謄写稿*、Ⅲ-16。原遺稿は散逸。量してならぬ対立は、〈個人主義および全体主義〉と〈社会主義〉の二者間の対立である。岡田裕之『日本戦没学生思想』法政大学出版局、2009年、242頁、参照。

* 以下、謄写稿とは『原版』編集用の応募稿のB5版表裏の謄写刷をさす。番号は岡田が付したもの。本誌、第579号、36-48頁、参照。）

田辺利宏

現行「十五年一月五日 晴

……生命も体も、逞しく成長してくれ。

無限への希求。

兵隊とは地の果ての人間だ。

兵隊とは、光栄ある囚人の世界に過ぎない。」58頁。

改訂「十五年五月十四日 雨

つめたい雨。今日は営内で天幕を敷き〔毒〕ガスの学課。何か心の底の方で砂のように崩れてゆくものがある。たしかに兵隊というものは最もニヒルな地の果の人間かもしれない。

十五年五月三十日 雨

むし暑い夜。一步外の自由の世界。光と愛と憎しみと。我々の〔は〕遮絶されてるいわば影の世界だ。表面我々は強い光の世界だ。逞しい前進の世界だ。しかし我々の精神は陰〔くら〕い。兵隊とは、光栄ある囚人の世界に他ならないのだ。」

（典拠：戦中、遺族秋岡都氏が「従軍詩集、蘇州日記」と題した田辺の遺稿を筆写したものによる。その中の十五年一月五日の日記には末尾の一部を除き『新版』の記述は見当たらない。田辺利宏（信貴辰喜編）『夜の春雷』未来社、1968年、32-33頁、岡田前掲書、290-291頁、保阪正康『「きけわだつみのこえ」の戦後史』文藝春秋、1999年、242-244頁、参照。）

篠崎二郎

現行「当市と相対応して近郊の守備地区も……朝夕仏前にどうか英霊をとむらってやって下さい。

同じ征衣の身、万感交々哀悼に一日を送りつつ、自分は本部にこんなでいいのだろうか、済まない済まない。戦友の悲しみ、戦争の悲劇をまざまざ体験し、苦しき極み。しかあれどた

だ小生は今しずかに思い、本部要員としての責務をしじに感じる。……今夜は月の美しい夜だ。征旅の身に、戦友の不幸、自分は！もし！妻はどうなるだろう……。生涯自分の妻であってほしい。永遠に。ひとりよがりかなあ——。月にものを言ったんだよ、失礼。」93頁。

改訂「当市〔南京〕と相対して近郊の守備地区も……心からの黙禱を捧げましょう。小生も本部要員ですがいつ出勤を命ぜらるるや分からない。……銃後のお前もあくまで軍人の妻として雄々しく自己の運命を拓いて下さい。お前の将来は両親、兄、姉も皆よく世話は見るでしょうが一度嫁いだお前だ。あくまで篠崎家の一員として、小生の意志を継いでもらいたい。如何なる運命に出遭うとも……篠崎家より一歩たりとも外へ出てはいけない。永遠に二郎の妻であってほしい。戦友の戦死にこんなにかく反省、また感動させられた夜はあまりない。今夜は静かだ。青々とした月だ。一入お前を胸近くに感じ、心静かな夜だ。」

〔典拠〕原遺稿。ただし『旧版』、『新版』の記述とつながるように、寿子夫人宛手紙第61信と第91信から合成した。討伐隊の戦死状況は『新版』とかなり異なる。岡田前掲書、198-199頁、参照。謄写稿は遺族（実兄）が戦後に作成した応募稿に従う。本誌、第579号、38頁、参照。）

上村元太

現行「夢。軍隊では不用で寝込む筈だのによく夢をみる。軍隊では不用で、寝込む筈だが、よく夢をみる。」125頁。

改訂「夢、軍隊ではつかれて寝込む筈だのによく夢をみる。」

〔典拠〕原遺稿。上村稿は『新版』で原遺稿を典拠に用いたと確認できるほとんど唯一のものである。にもかかわらずここでの誤りも数多く、95年当時の編集者がいかに典拠を慎重に扱っていなかったかを例証する。編集者は「つかれて」を「不用で」と読み違え、一つの表現を二行に重ねている。これは岩波書店側の校正の不手際を示す。さらに編集者は〈旧かな〉を読み取れず、「生活をおほひ（おおい）する」を「生活をおほほする」と読み「おほほ」を「果す」「生す」と注釈する。『新版』127頁。）

板尾興市

現行「吾々は在りのままのこの現実認識に基づいて、与えらるべき行動形式の中に十分に主体性を生かして行かねばならぬ、学問をするものが捲き込まれてその冷静なる判断と堅格なる行動とに蹉跌あつてはならぬ。」175頁。

改訂「吾々は在りのままの現実認識に基づいて、与えらるべき行動形式の中に捲き込まれて、その冷静なる判断と堅格なる行動とに差違あつてはならぬ。」

〔典拠〕原遺稿は散逸。謄写稿、Ⅲ-193。一橋いしぶみの会編『一橋人と昭和の戦争』2010年、20頁、参照。）

佐々木八郎

現行「ジョン・モリスの講演を聴きに出る。ヒマラヤの天候、チベット高原の高気圧よりの風のこと、酸素技師のこと、気象学のこと、チベット族のこと、あるいは高所における人間の働き等、興味津々。彼等の山への情熱が徒らに形而上的に走らず、極めて科学的である点、学ぶべき所が多かった。」193頁。

改訂「ジョン・モリスの講演を聴きに出る。ヒマラヤの天候、チベット高原の高気圧よりの風のこと、酸素ボンベの操作法のこと、高地気候への適応のこと、チベット族のこと、あるいは高

所における人間の働き等、興味津々たり。また僕が早速彼に尋ねたことだったが、彼等の山そのものへの情熱が単に形而上学に逃避せずに、システムティックであり、科学研究を高所において行うことなど、学ぶべきは実に多かった。」

（典拠：原遺稿。『新版』は不正確な二次資料である藤代肇編著『佐々木八郎、青春の遺書』昭和出版、1981年、を丸写ししている。本誌、第578号、22-29頁、参照。ここで佐々木がイギリス人講師に質問した事実は重要で、戦没学生、佐々木八郎、中村徳郎と敵国イギリス人、ジョン・モリスとの戦中の国際連帯の伏線となる。モリスはグルー（米国の駐日大使、国務次官）と関係があり、対日占領政策に影響を与えたと推定できる。岡田前掲書、95-98頁。）

現行「[昭和十八年] 五月十四日（金）

今まで資本主義は各種の矛盾を暴露しながら進展をとげてきた。……

個人主義は資本主義のエトスである。……

一応新しき時代のエトスに近いものが見られ、……

一度や二度敗けたって、日本人の生き残る限り、日本は滅びないのだ。

はや我々は「組上の鯉」であるらしい。悲観している訳ではないが事実は認めねばならない。

苦難の時代を越えて進まなければならぬ。」195-197頁。

改訂「五月十四日（金）

Rückkehr zu Adam Smith [アダム・スミスへの回帰]

今迄資本主義は各種の矛盾を暴露しつつ進展をとげてきた。……資本主義は遂に現在、その全面的な崩壊の過程に入らんとしている。……

資本主義社会にあっては自由競争・自己責任・私有財産などの諸原則の故に、人は常に“経済人”であることによつてのみ生活することができる。経済人として有能な者が勝利者であった。マックス・ウェーバーの言う資本主義のエトスとはこれの初期的な形態であった。[だが現在では] 資本主義のエトスは過去の遺物と化してしまうのである。新しきエトスに導かれねばならぬ。自然科学的、法則実体的であった経済学は主体的、政策的理論たることを要求される。問題はここだ。ここで僕はZurück auf Adam Smith [アダム・スミスへ帰れ] を叫びたいのだ。スミスは新しき経済を導くべきエトスを『道徳情操論 [道徳感情論]』において論じ、自然法的考え方に導かれてこれから造りださるべき社会の理想を描いたのである。我々も今この転換期にあたり資本主義を導いたエトスに別れを告げ、新しきエトスに導かれてこれから作りあげらるべき社会像を描く義務があるのだと思っている。

個人主義は資本主義のエトスである。新しきエトスは全体主義でなければならない。国家でもよい。世界でもよい。社会全体のために働く者の安全は社会全体が保証してやる所に新しい時代のエトスがある。すべての人のすべての行為がみな人よよかれかし、世よよかれかしと願うものであったとすれば…… [本文の省略符]。[この] エトスは人への、および仕事を通しての人への愛なのだ。愛の世界の実現される日は何時のことだろう。誰もが自分のことを心配する必要のない社会を造りあげるのが我々の任務なのだ。もちろんかかる愛の世界（こう言うとは何か甘いみたいだが…… [本文の省略符]）もスミスの描いた自由主義の経済が実現されず、世界国家の国際分業が行われなかったように、種々の弊害のために完全なものとしては実現されないであろうが、ただ常に我々はこれに近づくべき義務を有している。

一応新しき時代のエトスに近いものが見られ、……

はや我々は“組上の鯉”であるらしい。悲観している訳ではないが事實は認めねばならない、苦難の時代を越えて進まなければならぬ。

一度や二度敗けたって日本人の生き残る限り、日本は滅びないのだ。」

(典拠：原遺稿。佐々木の43年5月14日の日記は長文のもので、岩波文庫版の紙幅に収めるのは簡潔に要約する必要がある。だが主題は明瞭であり、佐々木はこの日の日記に特別の表題を掲げて、アダム・スミスのエトス論を強調した。だが『新版』は藤代前掲編著を吟味なしに丸写ししたために、佐々木を「マルクス主義者」のように描きだしてアダム・スミスへの傾倒を故意に削除する結果となった。岡田前掲書、20-28頁、参照。しかもこの日の日記は佐々木が後世に遺した学問的遺書とも言うべき未完の論文「生産力」と“経済倫理”，その歴史的研究の簡潔な要約であった。藤代氏も『新版』編集者もこの論文を見ていなかったし、その存在をも知らなかった(本誌、第578号、26-29頁、参照)。この日の日記全文は内容上重要なので、本誌、第578号、付属資料、に復元し、岡田前掲書、284-289頁、に再録した。)

現行「憎まないでいいものを憎みたくない、そんな気持なのだ。正直な所、軍の指導者たちの言う事は単なる民衆煽動のための空念仏としか響かないのだ」206頁。

改訂「憎まないでいいものを憎みたくない、そんな気持なのだ。正直な所、暴米暴英撃滅とか、十億の民の解放とか言う事は単なる民衆煽動のための空念仏としか響かないのだ。」

(典拠：原遺稿。筆写稿(『原版』最終編集稿)には〈暴米暴英撃滅とか、十億の民の解放とか〉の部分に赤線が引かれ〈軍の指導者の〉と編集者の手で書き変えられている。改竄の証拠である。ただしこれは『きけわだつみのこえ』の前身『はるかなる山河に——東大戦没学生の手記』東大協同組合出版部、1947年、冒頭に掲載された佐々木稿、「愛」と“戦”と“死”から『原版』『旧版』と継承されており、占領軍の検閲の痕跡と思われる。お粗末な検閲であるが、占領後にこれを放置した責任は『原版』編集者にある。『新版』編集者は『旧版』編集者を非難するならばここを先ず訂正すべきであった。)

松岡欣平

現行「『無法松の一生』を見た。入営前の心境であったためか、妙に印象が深い。阪妻〔阪東妻三郎〕の熱演によるためか。近來の映画中傑作の一つとして見る事ができた。思い出ふかいものとして残るであろう。……〔本文の省略符〕映画は随所にカットがある。松五郎の生涯をうつつつつ、吉岡夫人に懸想する部分がすべてカットされ、……〔断りない限り岡田の省略符〕」218頁。

改訂「『無法松の一生』を見た。入営前の心境であったためか。妙に印象が深い。阪妻の熱演によるためか。近來の映画中傑作の一つとして見る事ができた。思い出ふかいものとして残るであろう。時代は日清日露の役前後明治中葉、場所は九州小倉の街、時代と場所の選定がよかったのが成功の因の一つであったろう。映画は随所にカットがある……」

(典拠：原遺稿。『無法松の一生』は小倉という大陸進出の軍都を舞台に、日露戦争から第一次世界大戦にかけての時代を背景にした、車引き松五郎の軍人未亡人、吉岡夫人への秘めた愛を描いた映画である。この映画の封切は43年10月半ばで、松岡は、学徒出陣令(10月2日)から入隊(12月1日)までの間にこれを見た。この映画は戦意高揚のため肝心の部分をカットした骨抜き映画だが名作で、松岡はこれを見て感動的な文章を遺し、「昭和五年頃」の自由主義時代と軍国主義の現在を対比して現在の批判に及んだ。検閲によるカットは「無学粗暴な市井無頼の人間が大日本帝國陸軍軍人の将校未亡人に恋慕の情を抱くなどとはもつてのほか」と言う理由だった(白井佳夫「無法松の一生と戦没学徒兵」『文藝春秋』1989年7月号)。松岡は静岡高校時代、映画に熱中し自ら反省するほどだったから、映画の原作、岩下俊作「富島松五郎伝」(1939年)を読んでいたのだろう。映画の検閲カット部分がどこかすぐに分かった。ここは『旧版』のときから、原遺稿からの乖離、脱落として会内外から指摘

されていた。森馨子『『無法松の一生』と戦没学生の手記』『月刊社会党』1990年8月号、同「松岡欣平の遺稿」『わだつみのこえ』95号、参照。）

渡辺 崇

現行「けれども僕の心の中の文章は神様だけがふっくらとした貴女のあの白い胸に伝えて下さるでしょう。

今の場合、僕にはこう考えるよりほかに方法がないのです。

さようなら、僕のローズマリー、ああもう永遠に逢う事は出来ないでしょう。

——入団〔海兵団〕前夜記す——」222-223頁

改訂「けれども僕の心の中の文章は神様だけがふっくらとした貴女のあの白い胸に伝えて下さるでしょう。

今の場合、僕にはこう考えるよりほかに方法がないのです。

さようなら、僕のローズスーリ、ああもう永遠に逢う事は出来ないでしょう。

——入団前夜記す——」

（典拠：原遺稿は散逸。『旧版』152頁、では正しく〈ローズスーリ〉となっていたのを『新版』は偶然入手した謄写稿、Ⅲ-43、の誤記を無批判に写して改竄した。謄写稿と『原版』が異なるのを吟味すべきであった。ローズスーリとはフランス映画『白鳥の死』（原作37年、日本公開41年）の少女役の役名であり、ジャニーヌ・シャラが演じた。主役は女になりかかった少女の幼い魅力をたたえていてショパンの「レ・シルフィード」のバレエとともに西欧にあこがれる出陣世代の若い学生をひきつけた。短い胸に迫る遺稿である。これは謄写稿のミスであり『旧版』が正しい。）

中尾武徳

現行「肉体は死しても靈魂は不死であると考えことは果たして真理であろうか。われわれの生はこの絶対者の顕現とも言えるが、……」226頁。

改訂「肉体は死しても靈魂は不死であると考えことは果たして真理であろうか。我々の生はこの世を超えた「あるもの」なしには考えられず、その意味で絶対者の顕現とも言えるが、……」

（典拠：原遺稿。中尾は小学校5年12歳から学徒出陣に至るまでの日記を遺しており、遺族が全部保存していて、過酷な時代に生きそして死んだ青年の精神の貴重な記録となっている。岡田前掲書、50-77頁、『探求録（中尾武徳遺稿集）』權歌書房、1997年、608頁、参照。）

中村徳郎

現行「〔昭和十八年〕九月十九日

最近内務班で〔斉藤〕茂吉氏の『白桃』と〔尾崎〕喜八氏の詩集とが眼に映った。喜八氏の詩を読んでいる人がここにいるということそのものが私の心を喜ばさずにはおかなかった。……」235頁。

改訂「九月中旬某日

夜は独りで『白桃』を読んだ。頁を開いた真中へ鼻をつけるようにして紙の香を嗅いだ時、涙の滲むような感激を覚えた。『高山国吟行』を繰返し読む、素肌に秋めいた風が当たる静かな晩である。

九月十九日

最近内務班で茂吉氏の『白桃』と喜八氏の詩集とが眼に映った。喜八氏の詩を読んでいる人がここにいるということそのものが私の心を喜ばさずにはおかなかった。」

〔典拠：原遺稿。ここは、中村が持ち込んだ『白桃（しろもも）』を九月10+ α 日（中旬某日）に読んで感激し、数日後に、軍隊の内務班で（兵営内の文庫で）茂吉と自分が愛好する喜八の詩を読んでいる人がいると知り喜ぶ、という筋である。『旧版』（178頁）では九月十二日の項目に中旬某日と十九日の日記が纏めて採録されていた。原遺稿では日記の九月十二日は空白で、10+ α 日と十九日が続く。『新版』は中旬某日の日記を削除したため中村の感動の理由が十分に伝わらない。岡田前掲書、102-103頁、わだつみ会編『天皇陛下の為のためなり（中村徳郎遺稿集）』径書房、1986年、76-77頁、参照。〕

西村健二

現行「〔昭和十九年一月二十日、兄、亮一氏への手紙〕

柳田先生の弟殿は誠にお気の毒ですね、しみじみ感じます。」254頁。

改訂「柳田先生のご令息〔柳田陽一氏〕は誠にお気の毒ですね、しみじみ感じます。」

〔典拠：柳田陽一氏の42年10月の軍隊での事故死は、『新版』68-69頁、に明記されている。「柳田先生」とは柳田謙十郎氏（哲学者、戦後、初代わだつみ会理事長）であり、「弟殿」は誤り、西村の思いちがいである。西村亮一氏と陽一氏は台北高校・京大を通しての友人であった。西田幾多郎の陽一氏殉職に際しての謙十郎氏宛の哀悼文が学習院大学に保存されている。〕

山根 明

現行「ソノ前ノゲルマニヤ〔ドイツ〕ノシラー『[ウイリアム・]テル』ノ豪壮ナルニ比シ、誠ニ繊細ナル仏語□□□□□□□□（七字解説不能）アトモスフィヤ。今ケヤキ散ルムサシ野ノ一角ニ当時ヲシノビツツ、シラノ、クリスチャン、ロクサーヌノ物語ヲ読ム。」259頁。

改訂「ソノ前ノゲルマニヤノシラー『テル』ノ豪壮ナルニ比シ、マコト繊細ナル仏語班ラシキアノ〔解説〕アトモスフィヤ。今ケヤキ散ルムサシ野ノ一角ニ当時ヲシノビツツ、シラノ、クリスチャン、ロクサーヌノ物語（否、詩）ヲ読ム。」

〔典拠：原遺稿。三高仏語班の演劇の東京での回顧。『原版』編集者が解説不能だったのは六字である。〕

宇田川達

現行「〔昭和十九年九月二日 邦子夫人への手紙〕

……市内一斉消灯、ちょうど今夜は十五夜なので月の光で書く。なんたる気持、ベートーベン はMoonlight Sonataを月の光で走り書きと言う文句がある。そして私は邦子に月光を浴びつつ手紙を書いている。……もっとももっとつきつめた所迄書きたいけれど、ここ広島は非常に憲兵がやかましい所で、手紙は郵便局で全部検閲する為に書けない。」314頁。

改訂「〔ノート『水漬く屍』より〕

てがみ

……市内一斉消灯、ちょうど今夜は十五夜なので月の光で書く。なんたる気持、ベートーベン はMoonlight Sonataを月光の中に書き上げた。『暁に祈る』（戦中の流行歌）の中にも月の光で走り書きと言う文句がある。そして私は邦子に月光を浴びつつ手紙を書いている。……もっと

ともつつきつめた所迄書きたいけれどここ広島は非常に憲兵がやかましい所で、手紙は郵便局で全部検閲する為に書けない。…… 九月二日記

〔典拠〕原遺稿。この「てがみ」と題する文章は、宇田川が『水漬く屍』と表題をつけたノートに九月二日に密かに書きつけた文章であり、投函した手紙ではない。広島は軍都であり宇田川の属する陸軍船舶部隊の本部所在地であった。『新版・第二集・きけわだつみのこえ』264-265頁、参照。邦子夫人は、この文章を、幸運にも激戦のフィリピンから44年12月一時帰国できた夫から『水漬く屍』を見せてもらって、初めて読んだ。「宇田川達氏令夫人、柿沼邦子さんに聴く」『わだつみのこえ』第118号、参照。

『新版』編集者は、ここを謄写稿、Ⅲ-53-54、から増補したのだが、一行飛ばして文章をつなげたので意味不明となる。「月光ソナタ」も流行歌も区別なしの無教養である。しかも宇田川謄写稿、Ⅲ50-69、はずでこの「てがみ」の文章を他の邦子夫人宛手紙とは別に『水漬く屍』より、と明記している。因みに、このノート『水漬く屍』は、防備の任務で乗船した東京香椎丸の沈没により宇田川が体に巻いてレイテの海を必死に泳いで日本に持ち帰ったものであり、ノートの字は海水に漬かり滲んでいる。これは『わだつみのこえ記念館』が所蔵する。）

上原良司

現行「[昭和十九年]十一月十九日

日本軍隊においては、人間の本性たる自由を抑えることを修業すれど、謂く、そして自由性のある程度抑えることができると、修養ができた、軍人精神が入ったと思い、誇らしく思う。およそこれほど愚かなものはない。人間の本性たる自分を抑えよう抑えようと努力する。何たるかの浪費ぞ。」372頁。

改訂「日本軍隊においては、人間の本性たる自由を抑えることを修養すると謂う。そして自由性のある程度抑えることができると、修養ができた、軍人精神が入ったと思い、誇らしく思う。およそこれほど愚かなるものはない。人間の本性たる自由を抑えよう抑えようと努力する。何たる力の浪費ぞ。」

〔典拠〕原遺稿。〈人間の本性たる自由〉は上原の主張の基本である。力の浪費を「かの浪費」と読み取る。これは二次資料『あゝ祖国よ、恋人よ（上原良司遺稿集）』252-253頁、を丸写ししたためである。「厳密なテキスト・クリティーク」（『新版』498頁）など何もない。）

林 憲正

現行「六月三十日

朝起きて見ると雨。……レコードをかけながらこれを記している。……窓外は相変わらず霖雨。私は凡てどうすることも出来ぬ。

私はまことに近い将来この世から去らねばならぬのであるから。」393頁。

改訂「六月三十日

朝起きて見ると雨。……レコードをかけながらこれを記している。……窓外は相変わらず霖雨。

近頃女性の「真実な気持」と言うものをしみじみと感じた。私が女性について考えていたワイニゲル的な観方は日本女性に対しては或程度いや相当程度の修正をほどこさなければならないと思う。石野の妻女、山木の妻女の話聞き、彼女達を観察し、或は「特攻隊の皆様へ」と血の鉢巻を送って来る女性のことなどを思うとき今の娘達の強さ逞しさにしみじみと

感心せざるを得ない。殊に私の直面した女性の怖いような「一途さ」に打たれる。

しかし私は凡てどうすることも出来ぬ。

私はまことに近い将来にこの世から去らねばならぬのであるから。」

(典拠：原遺稿散逸。謄写稿，Ⅰ-80。林は待機中の特攻隊員の、内実は陰鬱ながら表面は軽々しい日常生活を記している。私は以前ここを陰鬱な気分と霖雨とを重ねて理解しただけだった。だが謄写稿を読むと、そこに「ワインゲル的な観念」とありこれは「ワイニンゲル」の誤記とわかった。ワイニンゲル Otto Weininger, 1880-1903, はオーストリーの早逝の哲学者で、ナチ風の女性差別論で有名で、主著『性と性格』は36年に邦訳されていた。ここで林は、日本の女性が男性と同じ決死の覚悟で戦争に臨んでいる、ワイニンゲルの女性差別観は妥当しない、と感嘆し、「しかし私は凡てどうすることも出来ぬ」と嗟嘆する。)

住吉胡之吉

現行「昭和二十年三月五日

……祖国愛，自分は従容として死に就くことは出来るつもりなり。しかし国家への疑惑あるを否定し得ない。国家は問題でなく，現在の日本自体が解答である。またこの美しき日本に生を受くる恵みへの感謝何人に劣ろう。だが日本のより美しきより高きを願う心が，現実の日本へ割り切れなさとなって疼く。」418頁。

「五月四日

……正直に自分の日本に対する気持。日本は好きだ，愛する。だが，日本の国体云々以上に，日本人は大きく人間の運命を考えなければならないのではなからうか。」423頁。

改訂「三月五日

……祖国愛，自分は従容として死に就くことは出来るつもりなり。しかし国家への疑惑あるを否定し得ない。国家は問題でなく，現在の日本自体が解答である。又この美しくより高きを願う心が現実の日本へ割り切れなさとなって疼く。

五月四日

……正直に自分の日本に対する気持。日本の国体云々以上に，日本人は大きく人間の運命を考えなければならないのではなからうか。」

(典拠：原遺稿散逸。謄写稿，Ⅱ-2，5。『新版』は正しい『旧版』298頁，を否定し、『はるかなる山河に』201頁の誤りに立ち戻る。編集者は『旧版』の誤り(中村克郎氏の「悪しき意図」)を強調したくて、49年『原版』(事実上『旧版』)を47年『はるかなる山河に』に戻した。実態は逆で『旧版』は『はるか』より改善されている部分が多い。本誌，第579号，40-41頁，参照。住吉稿の「三月五日」日記は『旧版』で訂正されており、「五月四日」日記は『はるか』208頁の誤りをそのまま継承している。)

高木 孜

現行「昭和二十年八月十七日

……単独の公用外出禁止。給養二食半定量。ソ(連)兵来るの噂とぶ。駆逐艦興南入港の噂入る。庁舎にて重要書類その他を焼く。」432頁。

改訂「昭和二十年八月十七日

……単独の公用外出禁止。給養二食半定量。ソ(連)兵来るの噂とぶ。ゲーペーウー[ソ連秘密警察部隊]潜入。駆逐艦興南入港の噂入る。庁舎にて重要書類その他を焼く。」

（典拠：謄写稿，Ⅲ－152。筆写稿では〈ゲーペーウー潜入〉の箇所が赤線で抹消されている。『原版』編集当時は既に占領軍の検閲は行われていなかったから、この削除は、マルクス主義・共産主義の影響が強かった東大の学生編集部のイデオロギー的偏見に基づくもの、と推定できる。これは『旧版』に残っていた改竄であるが、『新版』は『旧版』の改竄を正さず、これを放置した。『新版』編集者には『旧版』編集者を排撃するという動機が基本で、『旧版』に残る改竄の訂正など念頭にない。）

※ 重要だが複雑な（紙幅を要するので説明は略す）改訂事項，戦没学生別

石神高明，武井 脩，和田 稔

※ その他の瑕疵（ケアレス・ミスなどを含む）の箇所数（数え方による），戦没学生別

石神高明 1，大井栄光 2，福島武彦 3，田辺利宏 7，片山 澄 1，山岸久雄 1，柳田陽一 1，渡辺辰夫 1，篠崎二郎 17，平井撰三 1，上村元太 1，真田大法 2，中村 勇 5，武井 脩 2，佐藤 孝 2，加藤晨一 1，菊山裕生 5，佐々木八郎 12，松岡欣平 1，中尾武徳 2，中村徳郎 1，山根 明 14，松本光憲 2，塚本太郎 1，岩ヶ谷治禄 1，竹田喜義 2，永田和生 2，宇田川達 9，尾崎良夫 2，松原成信 3，御厨卓爾 2，林 市造 1，杉村 裕 1，市島保男 2，大塚晟夫 1，上原良司 13，林 憲正 2，三崎邦之助 1，関口 清 1，蜂谷博史 1，井上 長 3，住吉胡之吉 3，海上春雄 1，高木 孜 1，稲垣光夫 1，木村久夫 3。

2 解説などの訂正

(1) 解説の訂正（重要な項目のみ）

特別攻撃隊の命中率，20頁。

現行「特別攻撃機の敵艦への命中率は1－3％といわれている」

改訂について。日本側の特攻攻撃記録，陸海軍別特攻機損害・戦死記録，地域・時期別記録と連合国側の艦船損害記録を突き合わせると，敵艦船への命中率は6％以下ではない。さらに高い数値が多い。

日本青年の戦死は無意味，101頁。

現行「戦線の拡大とともに戦況は悪化し，末期には『学徒出陣』や特攻攻撃で多くの若者の命を無意味に捨てさせた。」

改訂について。これは編集者であるわだつみ会の日本青年の戦死に対する評価である。敗戦は日本国家（指導者—国民）の失敗であったが，多くの日本青年が国家の要請に従って戦死した。この悲劇の反省が平和主義と繁栄の戦後日本の大きな原動力の一つとなった。ましてや，彼らの血で遺した『きけわだつみのこえ』の編集者でありその印税で運動を続けるわだつみ会が，〈神〉でもあるかのように若者の戦死を「無意味」と断定するのは傲慢である。会は戦没者を手厚く葬らなければならない。

改訂「戦線の拡大とともに戦況は悪化し，末期には『学徒出陣』や特攻攻撃で多くの若者があたら

命を失った。」

理科方面への転科，186頁。

現行は説明が不十分であり，かつまた余計な部分がある。

改訂について。43年の徴兵猶予停止で主に文系学徒が陸海軍に入隊したが，入営延期の理系学徒も兵籍に入り召集に応じる義務を課せられた。敗勢が濃厚となった45年2月，理系の延期措置がかなり狭められ（「延期措置の解止」）多数の理系教育系学徒が出陣した。いわゆる理系学徒出陣である。これに比し解説中，成蹊高校の事例が特記されているが不要であろう。

ウルシー環礁，273，386頁。

現行「カロリン諸島。ヤップ島東北方のウルシー湾（礁島）」

改訂について。これは地理上の説明にすぎない。ウルシーは太平洋戦中，真珠湾から張り出した米軍機動部隊の最大の前線泊地で，回天特別攻撃の目標地であった。塚本太郎はここで戦死し，和田稔はウルシー—沖縄の米軍移動路の攻撃任務についた。

改訂「太平洋戦線における米機動部隊の前線泊地であり，カロリン諸島の一つ。ヤップ島の東北方にある。」

『ドイツ戦没学生の手紙』，238頁。

現行「第一次世界大戦後，フライブルグ大学教授ヴィットコップが編集，岩波新書」

改訂について。第一次世界大戦中からフライブルグ大学教授ヴィットコップにより一部が編集されていたが，戦後の28年，大幅に増補され，次いで33年，普及版が刊行された。高橋健二訳はこの33年版の抄訳である。当時ドイツはワイマール時代からナチ支配下の時代に移り，この本も国際主義の濃い内容から祖国愛の物語の色彩を帯びる。高橋訳はさらに37年，日中戦争の全面化，日独伊防共協定で軍国主義の風潮が強くなる時期に出版されたもので，高橋氏はこの本から国際主義の強調を骨抜きにし，肝心な部分を訳から削り，ドイツ人の「祖国愛」に燃える部分に重点を置いた。岩波新書は原本を歪曲した抄訳本である。岡田前掲書，98—101頁，参照。

改訂「フライブルグ大学教授ヴィットコップが1928年に増補した第一次大戦中のドイツ戦没学生の手紙集で，1937年，高橋健二氏が抄訳した岩波新書」

岩波新書『ドイツ戦没学生の手紙』引用の歪曲をめぐる『原版・旧版』の非難，253頁。

現行「……フランス兵を敵，ドイツとドイツ兵を味方と読み取ったのは，ドイツが第二次世界大戦の同盟国であるという意識がはたらいたためであろうか。」

削除。この論点は，高橋抄訳『ドイツ戦没学生の手紙』の一節の引用をめぐる極めて些細な，取るに足らぬ，論点である。本誌，第579号，50頁。この*印注記は全文の中で際立って異様である。第一に，この注記は用語や状況の説明（『新版』凡例，四，7頁）ではなく，本文の是非に付けられた唯一の*印別注である。第二に，この注記の眼目は，当該戦没学生，中村徳郎の文章の解説にあるのではなく，『旧版』編集者である中村克郎氏が実兄の原文を歪曲したと非難して，『新版』

編集の正当性を主張するところにある。第三に、これは岩波新書の「邦訳原文」を根拠に克郎氏の改竄を主張するが、『新版』編集者は当の独文原書、Kriegsbriefe gefallener Studenten,のどの版にも当たっていない。第四に、この注記は第二次大戦中のフランスのヴィシー政権とドゴール政権の交替という国際的位置の転換に無知であることを示す。フランスは40年に敗戦国となり、44年8月、対独協力国から戦勝国にすり変わる。

特別甲種幹部候補生，388頁。

現行「85頁参照」

改訂について。『新版』参照頁には「幹部候補生」の説明はあるが、44年9月に設置された「特別甲種幹部候補生」の説明はない。これはそれまでの幹部候補生（陸軍）が、海軍予備学生とは異なって、最下級の二等兵から昇進する手順だったのを改めた制度で、特別甲種幹部候補生，略称「特甲幹」，は兵段階を省き、下士官の伍長から将校に昇進する制度である。緊急措置で将校の速成養成を目的にしたが、すぐに敗戦となる。

（2）戦没学生遺稿の説明の訂正

『きけわだつみのこえ』各版において手記の原遺稿を明示する場合がある。これは応募稿が記載していたからであろう。その後遺書展などで判明した限りで誤りを訂正しておく。

和田 稔，387頁。

現行「この日記は数冊の手帳に書き込まれており、敗戦後遺品として家族に引き渡された終りの部分を除き、面会の際に、弁当箱の底に油紙に包み、その上に御飯を盛ってひそかに両親に手渡されたものである。」

削除。学生時代の日記から回天訓練中の殉職にいたるまで和田の遺稿は遺族によりよく保存されており、和田稔『わだつみのこえ消えることなく（和田稔遺稿集）』角川文庫，1995年，に公刊されている。『新版』掲載の部分は和田が横須賀から移動した長崎県川棚基地，山口県光基地での手記である。基地での両親との面会の機会はなかった。

海上春雄，427頁。

現行「昭和二十年一月，ルソン島にて出撃前の『メモ』に鉛筆書きの絶筆」

改訂について。この絶筆は、戦後帰国した高田須美子氏が47年、父親海上浩氏宛に郵送した封書とともに、遺書展に展示された。絶筆は44年12月、特攻出撃の命を受けた海上がマニラ在住の高田氏に託したものと判明した。春雄氏はピアノが好きで高田宅で弾いていたという。岡田「遺稿に刻まれた戦没学生の苦悩と知性と愛と」『わだつみのこえ』第116号，参照。外地で戦死した戦没学生の遺稿が多くの人の手を経て祖国に戻り、編集部に渡り採録された経緯も記録されるべきである。

改訂「昭和十九年十二月中旬，出撃命令を受けて両親に届けるようマニラ在住の高田須美子氏に託したもの」

(3) 戦没学生の経歴の訂正（学生名のみ）

上原良司，吉村友男，田辺利宏，平井撰三，真田大法，塚本太郎，長谷川信，永田和生，宇田川達，和田 稔，三崎邦之助，井上 長。

3 その他

(1) 『新版』編集当時わだつみ会が参照可能であった典拠

わだつみ会理事会が『旧版』の絶版『新版』の編集を決定したのは95年3月である。その時に会が保有していた原遺稿は、コピーを含めて上原良司，田辺利宏の原遺稿の一部と和田稔の応募筆写稿のみであったと推定できる。この時，原遺稿では，上原良司の全遺稿，柳田陽一の全遺稿，松岡欣平の全遺稿はそれぞれ遺族会員が保有していて参照可能であったが，編集者がこれら典拠を参照した形跡はない。参照していれば，三人については『新版』の「遺稿からの乖離」は防げた筈であった。会は95年，遺族に遺稿を求め，新たに上村元太の軍隊手帳や片井澄の手紙を入手した。だから，典拠たるべき原遺稿を完全に使用したのは上村稿だけだが，上村稿の杜撰な解説は先に見た通りである。

(2) 45名の謄写稿とその吟味

『新版』編集責任者，校訂委員長，藤本治氏（故人）は95年春頃，編集作業は「引き返すわけにはゆかず進むことも難しい窮状」にあった，と回顧する。この「窮状」をいささか打開したのがこの間（3月から6月の間か）に会員菊地信彦氏宅から提供された『原版』編集用応募稿の49年謄写稿の一部だった。これが『新版』編集の事実上の命綱となった（本誌，第579号，36頁）。その他は公刊物や私家版の個人遺稿集，集団遺稿集（私の試算で22冊以上）である。これらテキストは二次資料であって典拠たり得ないか，さもなければ厳格な吟味（テキスト・クリティーク）を行わなければならない。二次資料は基本は編集著作物であり，編集者の意図が基調とならざるをえない。それらの「丸写し」がいかに危険で，原遺稿からの乖離をもたらすかは，先に見た通りである。

さてこの使用可能となった45名分の〈謄写稿を典拠とした〉にしては，『新版』本文の謄写稿からの乖離が非常に多いのは何故か。宇田川達「てがみ」について見たように編集者はこの謄写稿を精査したとは思えない。他にも謄写稿を参照できた筈のもの，石神稿，福島稿，平井撰稿，佐藤稿，菊山稿，中尾稿，竹田稿，尾崎稿，松原稿，御厨稿，市島稿，三崎稿，住吉稿，高木稿，木村久稿は訂正されないままである。

ところで，謄写稿に全幅の信頼が置けるかというところではない。謄写稿が応募稿に依存したために，篠崎稿や田辺稿のように原遺稿から乖離した場合も少なくない。これは応募稿から編集された『旧版』においては誤謬とまでは言えないが，〈原遺稿から組み立て直した〉と自称する『新版』（『新版』497-498頁）には許されない欠陥である（本誌，第579号，37頁，参照）。

(3) 「校訂案」を作成した2005年の編集典拠

2005年、『第一集』校訂作業部会は「校訂案」を作成した。この時点では、戦没学生遺稿の収集は原遺稿（写真コピーを含む）、謄写稿、筆写稿を集めれば現行74名について完全に揃えることが出来ていた。1995年の時点とは全く異なった状況である。これは個々の原遺稿の収集を別にすれば、何よりも2001-02年に実施した遺書展の成果であり、続いて、中村克郎氏が保有する筆写稿全部（採録74名について言えば追加の55名分、候補作まで含めれば160名分）と謄写稿全部（採録74名について言えば追加の29名分）を、筆者が04年に氏から借覧出来たからである。こうして私は、第一集採録74名中、原遺稿19名、筆写稿71名、謄写稿全74名を参照して「校訂案」を作成し、同年9月、翌年1月の理事会を経て、理事会の決定とした。

(4) 典拠を欠いたまま『新版』を編集した真の理由。『旧版』すなわち49年『原版』編集者中村克郎氏からの権威剥奪

典拠を欠いたまま『新版』の編集を実施するのは冒険であり危険でもある。私はこの理由を94年総会の理事長人事をめぐる会の内紛に求めた。これは、前傾論文『『新版・きけわだつみのこえ（第一集）』の致命的欠陥について』、本誌、第579号の2、95年『旧版』＝『原版』を絶版とし、『新版』を編集した経緯、同誌、同号、30-33頁、に述べたので参照して欲しい。中村氏を排除して理事長となり『新版』編集責任者となった高橋氏、および氏を担いで中村氏を追い落とした事務局長が『新版』校訂の阻止に全力を傾ける理由はここにある。

おわりに

日本戦没学生遺稿の編集著作物である『きけわだつみのこえ』の『原版』は、中村克郎氏を軸とする日本戦没学生手記編集委員会により、309名の応募稿から編集され、1949年、東京大学協同組合出版部から刊行された。この『原版』は光文社版を経て、『第一集』は82年に、『第二集』は88年に岩波文庫に組み入れられて岩波書店から刊行される。岩波文庫はとくに知的な青年であった日本戦没学生の愛読書であったので、会はこれこそ著作者である戦没学生の「意図せざる悲願」であったろうと喜んだ。岩波文庫側は戦後生まれの著作の「古典」扱いには慎重であったが、30年を越えてまたさらに読み継がれるであろう『きけわだつみのこえ』の内容を評価し、あえて文庫に組み入れたのである。そこには著作権者（戦没学生）の遺志を尊重して編集に当たった編集権者（わだつみ会）とこれを古典として認定した出版権者（岩波書店）との深い信頼関係があった。わだつみ会はこのいわば「聖典」を持つユニークな平和運動団体として『きけわだつみのこえ』の普及に努めて印税を運動に費やし、それがまた岩波書店の宣伝、採算とも連動して、会と書店は密接な依存関係にあった。

95年、会の主導による『新版・第一集』の刊行はこの信頼関係を大きく損なうこととなった。当初、岩波書店側は中村克郎氏をめぐる会の役員人事内紛を知らず、95年の会の新執行部による『旧版』の絶版と原典（遺稿）のみを典拠とする『新版』を編集する提案を額面どおりに受け取ったに違いない。書店側は『新版』を『きけわだつみのこえ』の〈決定版〉として大宣伝を行った。

会側の『新版』印税収入は96年度260万円だったから、書店側『新版』売り上げは1年だけでも2,600万円以上になったであろう。

ところが93年、わだつみ会では学徒出陣60周年記念キャンペーンの盛り上がりと同時に、内部の紛争は深刻化していた。内紛の原因の一つは、中村理事長を中心とする遺族グループと理事長職の長期化（23年）を不満とする「若手」活動家集団の対立であり、その二は『わだつみのこえ記念館』建設の三億円募金をめぐる対立であった。この渦中の93年8月におこったのがNHKTVが放映した上原遺稿の改竄疑惑だった（本誌、第579号、32頁）。この内紛から94年総会での理事長交替人事となり、規約違反のクーデター紛いの追放に抗議して中村氏はじめ多くの遺族が退会する。典拠なき新執行部の突然の『新版』編集の企画は、こうして『旧版』編集者中村氏の権威剥奪の動機に由来する。

95年の時点において岩波書店側はイノセントであった。だが、98-99年訴訟で共同被告となった岩波書店は、編集権者わだつみ会の内紛を思い知らされたに違いない。裁判に参加した書店側役員は「とんだ内紛の被害者だ」と述懐していた。

こうして99年8刷の時点で岩波書店は『新版』の典拠がいかに危ういものかを痛感したに違いない。私は05年「校訂案」の作成から校訂実施寸前まで至った時期（同年5月）には岩波文庫課長塩尻親雄氏とは密接に連絡を取っていた。その後も『新版』の欠陥に関して公表した論文、資料、著作は書店宛に送付している。編集者側は『新版』の誤りを認めれば、中村排除の根拠を失い正統性を失うから自己防衛に必死で『新版』の改訂に応じるとは思えない。だが一番重要なのは著作権者、つまり戦没学生ではないのか。死んだ彼らは遺した遺稿でしか語れない。版權者である岩波書店が面子と採算を離れて、語るべき言葉もなく沈黙を強いられている戦没学生の遺稿を尊重し、遺稿から乖離した『きけわだつみのこえ』の訂正に積極的に応じるよう強く期待している。

2010年刊行の『岩波文庫解説目録』は『新版』を「酷薄な状況の中で、最後まで鋭敏な魂と明晰な知性を失うまいと努め、祖国と愛する者の未来を憂いながら死んでいった学徒兵たち。1949年刊行以来、無数の読者の心をとらえ続けてきた戦没学生たちの手記を、戦後五十年を機にあらためて原点に立ちかえって見直し、新しい世代に読み継がれていく決定版として刊行する」と紹介している。岩波書店は99年、「戦後五十年の節目の新版」が〈決定版〉でなかった事実を認めている。古典の版權者はその厳密なる校訂に責任を有する。

（おかだ・ひろゆき 法政大学名誉教授、わだつみ会元理事長）